

一九四五年八月・満洲葛根廟事件

——千人もの犠牲者を出した民間人避難団の悲劇

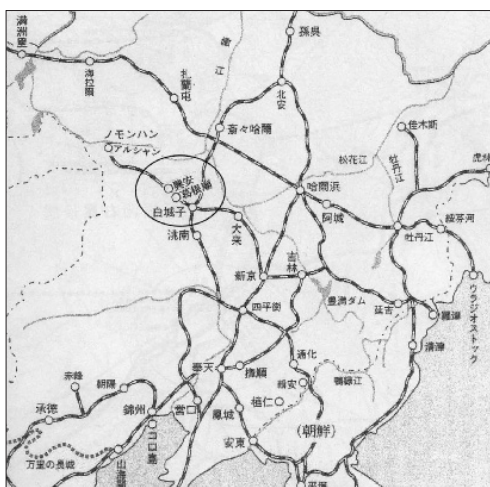
『興安街 命日会』代表 大島満吉

前置き

作家 元日銀副総裁 藤原作弥

(協会顧問)

旧満洲国の西側には縦に長く、興安省が東西南北の4つの省を形成しています



満洲・興安省地図

た。現在の内蒙古自治区の中にあります。当時の4省を統括する行政機関として興安総省が設置され、その省都が興安街におかれました。

興安省はもとも蒙古民族が3割を占めており、蒙古の独立志向を尊重する立場で日本の行政が進められた時期もありました。興安街には蒙古民族を中心とした軍官学校があり、特務機関や、憲兵隊、満洲国軍の53部隊など軍の中枢が所在する街でした。

私の父は、軍官学校で日本語を教える文官教師をしており、ソ連の開戦を知ると、軍と行動を共にできる幸運を得て、一足早く列車に乗って街を脱出することができたのです。

街をいち早く脱出できたとは言っても、それから1年余りは中国に残されて人

並みの難民生活を体験したのはほかの皆さんと同じです。

長じて新聞記者となり、戦後38年を経過して『満洲、少国民の戦記』という本を書き上げた時、同じ街に住んでいた同胞が、ソ連軍の戦車に蹂躪されて千人を超す大惨事が起きていたのを知ったのです。同じ街の住民でありながら、片や千人の犠牲者を出し、片や自分を含めて大部分が帰還した運命の差に驚きを覚えたのです。

ジャーナリストの一人として、この大事件を追及することにしました。時事通信のモスクワ支局員に頼んでソ連側の資料を漁ったのですが、この事件の明白な記録は見つかりませんでした。これから探してもおそらく出てくることはないでしょう。しかし、事実は事実なのです。



このほど数少なくなった生存者からの証言を含めて、過去に出ている貴重な証言を一冊にまとめて、犠牲者の七十回忌に合わせて証言集を発行した訳です。「興安街 命日会」編『葛根廟事件の証言―草原の惨劇・平和への祈り』（新風書房発行・3700円・税別）

前段の解説はこのくらいにして、この先は事件の生存者である大島さんに体験を語ってもらうことにしましょう。

ご紹介頂きました大島です

私は当時、国民学校の4年生でした。3軒ほど隣に兵隊の宿舎があり、そこに時々遊びに行ったのを覚えています。ある時、私に鉄砲の扱い方を教えてくれました。弾の出し入れや銃剣の着け方などを4年生の私に教えるのです。大人は子どもに大きくなったら何になるかをよく尋ねます。当時は航空隊が大人気でした。みんな飛行機乗りばかりでは困るだろうと私は戦車隊に入りたいと答えていました。

8月11日のことです。飛行機が興安街に低空で飛んできて爆弾を投下し、初めて空襲を経験しました。10数機の飛行機で空が暗くなり、爆音で空気が大きく振動し、建具がみしみしと音を立ててい

ました。1時間後に2度目の空襲があり、建物が破壊され、道路も損壊、通信が不能になりました。

隣組の小俣さんが走って来て、全員避難を開始するので6時までに広場に集まるようにと伝達してきました。この時の話では、今まで街に駐屯していた軍の関係者は昨日のうちに街を出て、今では軍の関係者は誰も残っていないとのことでした。

しかも軍がトラックや馬車や荷車を徴発したため、市民が移動する方法は徒歩しかないことが分かりました。

避難するといっても、何処に向かうのか、何日留守にするのか、どの位食糧を用意するのかといった大事なことはさっぱり分からないままでした。

母は兄の宏生（5年生）にリヤカーを持って来るように言いつけて、必要な荷物を積み込んで出発したのですが、道路が爆破されて通れない所に来てしまいました。子ども2人の力ではリヤカーが出せず、立ち往生している所に馬に乗った将校が通り掛かり、助手の兵



惨劇の舞台となった葛根廟近くの草原

士と2人でリヤカーを引き上げてくれました。

6時までに集合ということでしたが、街の人はなかなか揃わず、9時ごろになって漸く街を出発し、6キロ位離れているウラハタという所で仮眠をとりました。

次の集落に向かう時、知り合いの人が自分の荷物をリヤカーに載せてくれと頼んで来ました。次々に荷物が増えて、大人の人がリヤカーを曳いたり押したりしてくれたので、私たち兄弟は手ぶらで歩けることになりました。何しろ子ども連れの人が多いのです。若いお父さん達は召集されて多くの家で母子家庭でした。

リヤカーが役に立ってよかったのですが、2日後にそのリヤカーが行方不明になりました。聞けば、荷物を積み過ぎてタイヤがパンクしたため、リヤカーは荷物ごと置いてくるしかなかったとのこと…。ひどい話ではありませんか。一番多く持ち出した我が家の荷物は、ゼロになっちゃった訳です。母はかんかん怒っていました。



現場の情景（赤星月人画伯絵・『葛根廟事件の証言』から）

しかし、人生は何が禍になり何が幸運をもたらすのか、終わってみるまで分かりません。我が家は荷物を失ったため、歩きやすく、いつの間にか先頭に行くようになっていたのです。

愛犬チビとの別れ

興安街を出る時は愛犬の「チビ」がいつも一緒でした。子どもたちとペットはいつも仲良しで、どんなに辛い時でも

「チビ」の仕草に癒されながら一家は歩いていました。

2日目の朝、出発の号令で順次歩き出そうとした時、「チビ」の動作がいつもと違っていました。いつもは先頭になって歩き出す「チビ」が今日はくんくんと悲しげな声を出して足元にまつわりついているのです。「どうしたの？チビ」何か変だ……。元気がない。母が兄に言いつけました。「何かあるんだよ。お前、チビの行く方に行ってみな」

兄がチビについて行ってみると、チビは草叢に赤ちゃんを産み落としていたのです。びっくりした兄は母に状況を説明しました。「赤ちゃんが4匹くらいいるよ、どうしようか」

母も驚いて困っている。こんな所で赤ちゃんを産んだのでは手の施しようがない。チビはみんなが移動するのを感じ取っているのです。自分も困惑しているのでしょう。

もう自分たちの所属している4中隊は全部行つて、5中隊が後に続いています。何か段ボールでもあれば赤ちゃんを運べますが、こんな山の中にそれらしきものは何もありません。

「お前たち、もう行くしかないよ」と母が言います。「えっ！チビを置いて行

くの？」

チビは私達の移動するのを察知して追いかけて来ました。行かないで、行かないで。誰が残つてと必死に呼びかけている。しかし、私達は行くしかないのです。チビは悲しそうな声をあげて赤ちゃんのいるほうに戻って行きました。でも直ぐに駆けて来て、行かないで、誰が残つて！ありつたけの声で僕達を呼んでいました。足を踏ん張り、また巣の方に戻って行きます。

「なんて可哀想なことになったんだろう。どんな動物でも我が子が可愛いんだね」。母も涙声で振り返っていました。キャン、キャン、チビの声が聞こえます。すぐそこまで追いかけてきたのですが、チビはまた戻って行く。僕達も涙で前が見えなくなりました。チビ、元気でね、僕達が帰って来られたら必ず迎えに来るからね、それまで頑張つてね。チビ……。

ソ連軍の戦車現れる

3日目の朝は6時に出発です。後方に敵軍との情報が入り、すぐに出発して目的としていた葛根廟寺院まで急がねばなりませんでした。

午前11時ごろ、隊列は伸びてしまいい前

後では2キロ位に間隔が空いていたようです。1300名とも云われた集団です。子どもが多く、母親が1人で3人も5人も面倒をみなければならぬのですから仕方ありません。

幸いなことに我が家には荷物がありません。母は3歳の美津子を背負い、6歳の弟、潔の手を引いていました。父は警護の役目で後方に居たようです。兄の宏生は少しでも荷物を持たされていたので遅れていたようです。

先頭の方に居た私達に指揮官から「休憩、休憩！」と声がかかりました。長く伸びた隊列をまとめる必要があったのです。私は学童用オーバーを脱いで草むらに敷き、美津子が座れるように場所を作りました。

「重たかったよ、美津ちゃん」と、母が美津子を下ろして一息ついた時でした。

「戦車だ！戦車が来た、逃げろ！」指揮する在郷軍人の怒鳴り声が聞こえます。腰を下ろしていた人々が一斉に動き出しました。蜘蛛の子を散らすように人の流れが坂下に向かって走っているのが見えました。その後ろに戦車がうなりをあげてこちらに向かってくるのが見えました。

母は美津子を背中に括りつけます。私は外套を驚掴みにして走りしました。走り

やすい方角は坂下に向かうことです。草原地帯ですから隠れる場所はありません。とにかく戦車から少しでも遠くに離れることが先決です。戦車は轟々と音を立てて迫ってきます。銃撃音も聞こえます。キャーという悲鳴も聞こえます。遅れたら大変。母について走りに走りました。200メートル位走ったでしょうか。6歳の弟もよく走ってくれました。

走り続けるしかありません。走っていたら偶然にも大きな窪みがありました。とにかくそこに飛び込みました。勢いそのまま壕の縁にへばりつきしました。

丘の上では逃げ遅れた親子が戦車に轢き殺されたと思います。1人の子どもが走れなくなれば、親はその子を引き寄せるために止まってしまいます。2人の子を抱えた母親は走りたくても走れません。戦車は2輦や3輦ではなく14輦もいたとのことですから、逃げようがありません。私達のように窪みに身を伏せることができれば、戦車も銃弾も一時的にせよ避けられたのですが、丘の上ではどうにもなりません。あのキャタピラーの金属音は身体をえぐられるような恐ろしさです。息も殺すようにじっと我慢して伏せていました。

エンジンをふかす音、銃撃する機銃音、



こういう壕に逃げ込んだ

回転するキャタピラーの音で生きた心地がしません。人の悲鳴や叫ぶ声が続きます。炎天下に繰り広げられた地獄絵図でした。

小一時間戦闘は続いていたのですが、その後少し静かになりました。私は何気なく下手の方を見ますと、兵隊が3人で近づいてきました。私は日本の兵隊が応援に駆けつけてくれたのだとにっこりしてその兵隊を眺めていました。すると母の手が伸びて頭を抑えつけます。何か変だなと思ったら、それはソ連の兵隊が壕の中にまで入って来た所だったのです。兵隊はマンドリン銃といわれる機関銃のような武器を持って警戒するような目で

迫ってきたのです。

壕に飛び込んだ時には、周辺に誰もいなくてとても心細かったのですが、30メートルほど上手に30人位の集団がいました。その集団の中に鉄砲を持った男の人がいました。その男の人に女の人たちが「私を撃って下さいー私を先に殺して下さいー」と叫んでいるのが聞こえました。絶対絶命です。ソ連兵に撃たれるくらいなら日本人の手で殺して貰いたいと絶叫していたのです。それを見たソ連兵は私のすぐ後ろからその集団に向かって銃を乱射しました。銃撃の匂いが鼻につきます。ソ連兵の喋る声が不気味です。軍靴が砂利を踏む音で真後ろに兵隊がまだいることが分かりました。いつ撃たれるのか、銃尻で殴られるのか、恐怖が続きます。兵隊はどんどん進んで行きました。悲鳴は苦しさの呻き声に変わりました。今行った兵が戻って来るはずですよ。いや、次の兵隊が下手からまた現れるかも知れません。

じつと我慢の連続です。

号砲が遠くに聞こえました。戦車が再び動き出したようです。上手にいた赤ちゃんを抱いた女の人が近づいて来て「助かったんですね」と声をかけました。母はまだ正気にかえられませんでした。「お宅さんも無

事でしたか」やっとなを声を出しました。

戦闘が終わったのは分かりましたが、周辺を見たら生きている人はこの女の人以外、誰もいないのです。自分たちだけがこの世に残された恐怖感が襲ってきました。

正気に返った母は長男と父を捜すことにしました。生きているとは思えられませんが、せめて遺体だけは確認したかったのです。壕は百メートルくらい長かったように思います。しかも似たような壕がいくつも周辺にあったそうですが、怖くて外に出られないのです。戦車の通った丘の上は尚さら怖くて出られません。

1往復しても2往復しても父の姿は見つかりません。国民学校で6年生の担任だった福岡先生が銃を片手に無念の形相で死んでいました。

重傷を負っても死にきれず、苦しがつている人が大勢いました。親を失って泣いている小さな子どもが手を出して連れていってくれと哀願する目はとても辛いものでした。

どの人も息のある人は水を求めています。8月の炎天下です。傷が痛むのと熱で水が欲しいのです。母は弁当箱で水を掬い、水筒に詰めて水を欲しがっている重傷者に飲ませてあげました。1歳位の赤ちゃん

んが水を欲しがっていました。手を出して水をくれと口から泡を吹きながら訴えています。でもこれは泥水なのです。あのいたいけな小さな子にこの泥水は身体に毒です。母は心を鬼にしてその子にはあげませんでした。

段々陽が西に傾きます。生きている人が身内を捜すために三々五々現れました。在郷軍人の人が生きている人を手帳に書き留めて行きました。その中に父や兄の名はありません。5時頃になるともう疲れて捜すのもへとへとです。朝の6時に出発したのですが、朝から何も食べていないのです。

もうこれ以上捜しても無駄な感じがして一休みすることにしました。戦車の通った丘の方ではなく反対側の丘に上がったら、そこに粟の畑がありました。4人で1時間ほど畑の中に隠れて休んだのです。あんなに大勢いたのに、今では自分たちが生きているだけなんてとても変な気持ちでした。

ついに来たこの世との決別

一休みしてから母が言いました。「どうしようかね」と私に問いかけました。私はどうしたいという答えは持っていました。

せん。答えるには幼すぎました。「こうしていても仕様がなからもう一度、壕へ下りよう。生きている人に会えるかも知れないから」と母が言いました。

畑の中にじっとしていても先が開けるわけではないので、もう一度捜そうということになりました。しかし、その時点で母はもう覚悟をしていたようです。男の手がなくて、女子どもだけでこの先を生きていくのは不可能だとの結論です。

私自身もどうしたらいいのか見当もつきません。自分たちが住んでいた興安街では暴動が起きて、日本人住宅が襲われていると聞いています。目的としていた葛根廟にはソ連軍が先回りしています。ほかにいくべき場所も知りません。食糧もないのです。軍隊が守ってくれる訳でもありません。野宿をする準備もないのです。交通手段もなく歩くには限界もあります。通信もなく、地理もわからない、現地の言葉も話せません。どこまで行けば何とかなるという当てがありません。ただ草原を行っても野垂れ死にするだけでしょう。母は次々と子どもが倒れたら手のうちようがないと自覚していたのです。

「どうしようかね」とは、死ぬしかないだろうねという言葉の裏返しだったのです。いくら考えても出口は見つかりま

せんでした。

壕に戻ると在郷軍人が現れて、これから指揮はできないので各人の行動に任せるとのことでした。さらにつけ加えて重傷者を含め、生きる望みのない人は1か所に集まってもらい自決するしか手段は残っていないと宣告されました。幼児については親の手で処置して欲しいと言って在郷軍人は出て行きました。

やっぱり生きる方法はないのだと何となく感じました。そのうち母親達が自分の子どもに手をかける姿があちこちに見えました。いよいよこの世との決別です。

母は血にまみれながら重傷の在郷軍人から日本刀を借りて刺殺を断行しようと決心しました。刀を抜き取ろうとしたら、在郷軍人はまだ息がありました。気がついたその人は母に言いました。「奥さん、早まっではいけない。生きるんだ、奥さん」。虫の息でも本気で訴えていました。自分は死ぬけれど、無傷の子ども達を何とか生かしたかったのです。「奥さん！早まっではいけない」。でも母にはもう生きる力がありませんでした。

「ごめんね。美津ちゃん、母さんも直ぐ行くからね」、とうとう母は美津子の喉に刃を当てがいました。母に全幅の信頼をおく美津子は、母のなすまま、3歳の命

を閉ざしたのです。私は死にたくないなあ、1歩、2歩後ずさりしていました。

母はそのあと強制はしませんでした。美津子の傷口にハンケチをかけて拝みましたが、母さんも直ぐ行くからと言ったのですが、まだ2人の子をそのままにして自決する訳にはいかなかったのでしょうか。在郷軍人の言っていた自決場所へ向かっていきました。

その途中で橋本君のお母さんに出会いました。同級生の定夫君は弾に当たって死んだそうです。2年生の恵子ちゃんは弾に当たって足がぶらぶらになる重傷です。「痛いよー痛いよー、死にたくないよ、お母さん」と泣き続けています。でもお母さんは何もしてあげられないのです。移動もできず、寝かす所もありません。医者もいないし、手当する方法もありません。早く楽にして上げるには死を選ぶしかないのです。

少し行くと今度は小学校校長の子どもたち4人と出会いました。校長もお母さんも弾に当たり死んでしまったそうです。5年生の蓉子ちゃんは幼い弟3人を引きつれて、「おばちゃん、私どうしたらいいのか分からないの」と泣き声でうちの母にすがりました。

大人の母にさえどうしたらよいか分か

らないのですから、蓉子ちゃんの気持ちには痛いほど分かります。私達は自決と決めたのです。一緒に行きましょうと蓉子ちゃんに言いました。同級生の郁雄君に逢えた私でしたが、かける言葉がありません。生きていて良かったね、ではないのです。父がいなくなり、自分達の生きる望みがなくなった2人にどんな言葉があるのでしょうか。沈黙の時間が過ぎて行くだけでした。

自決の場所に来て座り込みました。大島家の次が小山家で、それが最後の順番です。

蓉子ちゃんは気を取り直して、最後の晩さん会をやらうと言いました。リュックに入っている食べ物を全部出してみんなで食べようと言うのです。朝から何も食べていない私達でしたが、これから死ぬとする前に食べたところで意味はありません。気が進まないのですが、蓉子ちゃんの出す角砂糖やそうめんを生で食べてみました。最後の晩餐は湿っぽく、食べると言うより仕方なく手を出しただけでした。

もう直ぐ暗くなる9時ごろの事です。地元の人間でしようが、死んだ人の持ち物や衣服を持ち去る姿が見えました。大勢の日本人が死んだことが、近くの集落

に通じたのでしょうか。物資のない時代でしたから、どんな物でも貴重なのです。

自決は最初は小銃での射殺でしたが、生き残って脱出した人が周辺にいる中で音を立ててはまずいと、小銃から刺殺に変わったようでした。執行しているのは在郷軍人で3人位でした。「御免なさい」と声をかけて日本刀を喉にあてがいます。1度で死んでくれたらよいのですが、中には暴れ出す人もいました。苦しいが立ち上がったたりされると執行人も追いかけるなどして一筋縄ではない場合もあるようでした。

段々に自分たちの番が近くなってきます。あと何番目かと気になります。立ったり座ったり、落ち着いてはいられません。死にたくないなあ、というのが本音です。しかしどうにもなりません。あと7番目で自分の番が来てしまいそうです。

そんな時、執行している3人の在郷軍人が、残りも少なくなつたので、一息入れようや、と休憩してしまったのです。待っている方は厭な時間が長引くので喜べる訳ではありません。

急展開で壕を脱出

暗くなつた所へまた物盗りが壕の中に

現れ、自分たちの方に近づいて来ました。人影は2人です。1人1人確かめるようにしながら目の前で止まりました。よく見るとそれは父と兄の2人だったのです。「お前たち、生きていたのか、随分捜したんだぞ」「えっ、あんたこそ生きていたなんて」。絶句する母。あれほど捜しても見つからなかった父や兄と奇跡の再会です。

「さあ、行くんだこんな所で死ぬ必要はない。満洲は広い、ここを出るんだ」と父。

「行く所なんかないよ。ソ連兵がこの中まで来たんだ。何処に行こうと言うのかね。それに美津子は死んだ。美津子の死んだ所で私は死ぬと決めたんだ。あんたは逃げるというならこの2人の子を連れて逃げておくれ。あたしは残る」と母がいう。

「済んでしまったことは仕方がない。ぐずぐずしていると面倒なことになる。さあ、早く行くんだ俺について来い」と父は急かした。死にたくないと思っていた私には道が開けて来た。私は直ぐに出るつもりになりましたが、母が残ると言うので困りました。夫婦で言い合いをしていましたが、父は弟の潔を背中にして強引に母を立たせました。

遂に死の淵からの脱出です。隣にいた小山家に何も告げないまま私達は壕を這い上がるようにしているのです。しかし足が思うように動きません。逃亡者が出たぞ！と誰かが言っているのでしょうか。美津子の霊が行かないでと呼んでいるのでしょうか。死んだ人の霊が足を引っ張っているかのように足が空回りします。小山家が私達も連れていってと叫んでいたのかも知れません。やっとの思いで壕を私は抜け出しました。

この先日本へ帰るまでにはさらに死地をくぐるのですが、それを話せば、あと1時間もかかるので、葛根廟を脱出する所で私自身の話はひとまずここで終わりにします。

田丸夏子さんのこと

最後に田丸夏子さんという人のことをご紹介いたします。この人は75歳から中国語の勉強を始めました。

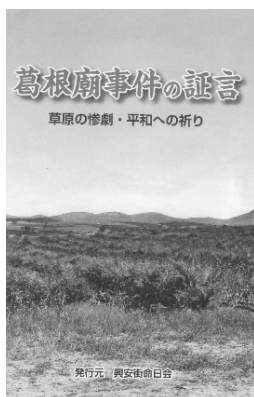
田丸さんは、戦争中に結婚されましたが、間もなく、夫の田丸貞衛さんは旧満洲の興安街の役所に単身赴任されたそうです。夏子さん

はついに満洲には行けませんでした。そして戦後になって貞衛さんは葛根廟事件で亡くなったとの通知を受け取ったのです。

新妻としてすまない気持ちで、長い戦後を一人暮らして過ごしました。聾哑学校の教師を35年勤めて退職されたのを機に、夫の亡くなった場所を訪ね、お詫びと慰霊をする決意を固め、そのために中国語の勉強を始めたのだそうです。

2001年5月、葛根廟の地にパオを建てて、その中に観音像を安置し、慰霊と平和を祈念する行事が行われることを田丸さんは知りました。「興安緑化・碑建立委員会」山田幸弘委員長の活動です。中国語教室の友人、木村明美さんと2人で早速参加を申し込みました。

16名の旅行団でした。最高齢は大嶋肇氏・93歳、次が和田福田さん・89歳。その時、田丸さんは86歳でした。念願叶った田丸さんは旅行記の中でこう書いておられます。



『葛根廟事件の証言』
2014年8月出版

「今回の旅は私にとって何より掛け替えのない旅でございました。永年、抱き続けて参りました念願が叶えられた旅でしたから。感謝

と安堵と喜びとそのほか諸々の思いが交錯しまして……。〔中略〕『葛根廟への願いを』とお尋ね下さいますならば、何とぞ彼の地をいつまでも聖地として扱って頂きたいとはかない望みを抱いております。……」

その田丸さんは90歳になられた時、遺言書を書かれて司法書士に託されていました。自分の死後、財産処分の折りには「興安緑化・碑建立委員会」と聾哑学校に寄付して欲しい、とありました。

そのお志を先頃の『葛根廟事件の証言』の出版や犠牲者名簿の作成・残留孤児支援・葛根廟訪問団の支援に遣わせて頂いております。以上のことを報告させていただきます。

(2014年9月17日・公開東北フォーラム)

講師略歴（おしま まんきち）

1935年 群馬県生まれ
満洲・興安街で敗戦を迎える

群馬県立沼田高校卒業
家電販売会社に勤務
現在「興安街 命日会」代表